

文学部・人文科学研究院

I	研究水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、人文学としての哲学・歴史学・文学の各領域の研究者を擁する組織として、平成19年度の教員一名当たりの著書・論文等の発表が1.7件、口頭発表が1.0件となっており、十分な水準を維持している。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の平成19年度の採択数が85件（教員一名当たり1.7件）である。これは21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」に伴う研究環境の整備と刺激が大きい。また、九州という地理的位置から、当該組織によるアジアとの研究交流には大きな期待が寄せられており、学部内に多くの学会事務局を置き、九州、東アジア地域の学会活動の拠点として重要な役割を果たしていることは、優れた成果である。

以上の点について、文学部・人文科学研究院の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、文学部・人文科学研究院が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

2. 研究成果の状況

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、構成員の活発な研究活動に基づく成果が数多く公開されており、21世紀COEプログラムの研究成果は、内陸圏・海域圏ネットワークとイスラム、東アジア古代国家論等に結実している。その他、優れた研究成果として、例えば、純化の思想家としてのルソー研究や高麗美術の再定置等が挙げられる。社会、経済、文化面では、原典の正確で豊かな理解を踏まえた研究成果を社会に還元するとの姿勢から、翻訳書や啓蒙書を発表している。そのなかで、中国魏晋南北朝の歴史研究、イスラム世界の農書の解説と日本・中国の農書との比較研究等を行うなどの相応な成果がある。

以上の点について、文学部・人文科学研究院の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、文学部・人文科学研究院が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

相応に改善、向上している

当該組織から示された事例は3件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」または「相応に改善、向上している」と判断された。

